

研究会報告



第79回 東京医科大学血液研究会

日 時: 平成14年10月28日(月)
午後4時30分～

場 所: 東京医科大学病院 本館6階
第二会議室

当番教室: 臨床検査医学講座

特別講演: 臍帯血移植とバンキングの現状と将来
東京大学医科学研究所
細胞プロセッシング研究部門 教授
高橋恒夫先生

1. 血友病A 遺伝子治療の基礎的検討: 脂肪細胞への凝固第VIII因子遺伝子導入

(臨床検査医学講座) 尾形 享一、新井 盛夫、福武 勝幸

【目的】血友病Aの遺伝子治療に対し、血液凝固第VIII因子(hFVIII)遺伝子の脂肪細胞への導入とその産生を試みた。

【方法および結果】BDD-hF VIII 遺伝子、LacZ 遺伝子およびGFP 遺伝子をSIVに組み込んだベクターを作成し、*In vitro*においてrSIV-GFP、rSIV-F VIIIを白色脂肪細胞へ導入した。その結果、脂肪細胞中にGFPの発現を認め、培養上清中にhFVIIIを検出した。次に、*in vivo*においてrSIV-LacZ、rSIV-FVIIIを糖尿病モデルマウス(db/db mouse)の皮下脂肪に導入した。脂肪細胞中に β -galactosidaseの発現を認め、マウス血漿中にhFVIIIの産生を認めたが、抗ヒト第VIII因子抗体が産生されたため、発現は一過性であった。

【結語】以上の結果より、脂肪細胞は血友病Aの遺伝子治療の標的臓器となりうることが示唆された。

2. HIV感染者の眼科診療

(眼科学教室) 箕田 宏、横井 克俊、柏瀬 光寿
山内 康行、薄井 紀夫、臼井 正彦
(臨床検査医学講座) 福武 勝幸

当科では平成6年3月に臨床検査医学講座の協力のもと、HIV感染者の眼科診療を目的とした血液外来を設立した。平成14年9月までに164名が受診した。受診者のうち半数以上がAIDS患者であった。男性が9割以上を占め、感染経路としては設立当初は血液製剤による感染者がほとんどであったが、昨年性行為による感染者が半数以上を占めるようになった。受診者にみられた眼合併症の頻度は全体で65名、AIDS患者に限ると47名と高率であった。眼合併症としてはHIV網膜炎が49名、CMV網膜炎が15名と多数を占め、その他の眼日和見感染症を少数認めた。HAART療法の導入によりHIV感染者の生命予後は飛躍的に改善し、眼合併症の発症率も減少したが、その反面眼疾患のマネジメント内容がより複雑に変化している。加えて抗HIV薬の副作用を含めた新しいHIV関連眼合併症も報告され始めており、今後も眼科医の役割は大きいと思われる。

3. PAIgG高値の妊婦の取り扱いについて

(産婦人科学教室) 永井 敦、芥川 修、糸数 功
磯 和男、鈴木 良知、井坂 恵一
高山 雅臣

妊娠中は分娩時期に向かうにつれて、一般的に血液における凝固線溶系の亢進がみられるが、血小板数は一般的に変化しないといわれている。今回我々は、1999年7月～2002年6月までの母体血小板減少を認めた症例に対し、血小板関連抗原(platelet-associated antigen、以下PAIgG)を中心として、病態、合併症の有無、妊娠経過、周産期管理、新生児予後などについて、検討した。対象は1999年7月～2002年6月までの妊娠中に血小板減少($<15 \times 10^4/\mu\text{l}$)及び、PAIgG高値($>25 \text{ ng/ml}$)を認めた33症例に対し行った。妊娠中の血小板減少の原因として(ITP、重症妊娠中毒症、HELLP症候群、その他の血液疾患)を除外した、原因不明血小板減少(妊娠性血小板減少症)は33例中11例と高率であった。妊娠中の治療の有無に関わらず、母体血小板数は分娩時に比し産褥期には優位に上昇した。